

## 養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み(2)

－ 幼児に対するサッカー活動の指導実践を導入した教育方法－

An Effort to Improve the Practical Nursing Ability in the  
Training Phase (2)

－ Education Method in which Coaching for Soccer Activity  
for Young Children is Applied －

時本 英知

Eichi TOKIMOTO

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

キーワード；保育実践力、指導実践、教育方法

### I. 背景と目的

文部科学省の学校保健統計調査によると青森県は5歳以上の肥満傾向出現率が全年齢で全国平均より高い状態が続いている<sup>1</sup>。この状態は保育所に通う3歳から5歳の子どもも同様に高いことが平成26年度の県内調査で明らかとなっている<sup>2</sup>。このような青森の現状において子どもの生活環境の改善は大きな地域課題となっており、各機関で様々な取り組みがなされている。その取り組みの一つとして子どもの運動の機会の拡大が挙げられる。

幼児期の運動習慣はその後の少年期の運動継続に影響を与えやすく、また、幼少期に運動を楽しんだ経験が多いと、大人になってからも趣味に運動を取り入れ、運動の魅力を子どもたちへ伝えていくことにもつながりやすい。このことから保育の現場で楽しみながら運動経験を積み重ねることは短期的には子どもの健康につながり、長期的には地域住民の運動習慣の獲得につながると考えられ、地域課題の解決のための有効な一つの方法と言える。保育者はその事を理解した上で運動をうまく取り入れた保育を実践できる力を身につけることが必要となる。そして、保育者養成校としては養成段階で地域課題に対応しうる力を可能な限り学生に身につけさせ、地域の課題解決に寄与していくことも大切な役割と言える。秋山（2011）は現場で求められる幼児教育職務実践力の指標の作成を目指して

1 青森県企画政策部統計分析課2016年1月発表資料「平成27年度学校保健統計調査速報（青森県分）」  
([http://www6.pref.aomori.lg.jp/tokei/document\\_view.php?sheet\\_no=3766](http://www6.pref.aomori.lg.jp/tokei/document_view.php?sheet_no=3766)) 2016.12.22閲覧。

2 朝日新聞（2015）「保育所の幼児肥満傾向」2015.8.27朝刊に掲載。

実施した保育現場の調査結果から「具体的な実践力を磨くことが養成校在生に必要であるということが、現場保育者からも強調されている」<sup>3</sup>としているように、その役割は保育者養成校の使命の一つと言わざるを得ない。

以上のような理由から本学では子どもが自ら身体を動かしたくなるような活動を展開する力を学生が獲得できるように、JFA 公認キッズリーダー資格取得学生を対象とした実践実習を設定し平成27年度から実施している<sup>4</sup>。この活動は本学が中心となり、一般社団法人青森県サッカー協会キッズ委員会、NPO 法人レアリススポーツクラブ、認定子ども園青森中央短期大学附属第一幼稚園との連携と協力のもと進めている。平成27年度に実践実習を実施した結果、時本・工藤（2016）によると「目の前にいる子どもの状況に合わせて計画を実施することの難しさ」を感じたり、目的に反して「サッカーをさせようとする動き」が活動を通して減少する傾向にあることが指摘されている。この理由として時本らは「子どもの反応や様子を通して気づくことができたり、学んだ内容を思い出した」という実践での気づきの可能性がある。しかし、子どもの反応からその意味を考え、計画に反映して実践できるようにしていく力が身についたかは、実践回数が少ないため明確に示すことは難しいと課題を挙げている<sup>5</sup>。

そこで本研究では平成27年度の反省や課題を踏まえながら実施した平成28年度に実践実習の内容と結果を整理し、保育実践力を育むためのより効果的な実践実習のあり方について検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象

本研究では平成27年度もしくは平成28年度にJFA 公認キッズリーダー資格を取得した幼児保育学科と専攻科福祉専攻の学生のうち、希望者を対象に実施した実践実習の活動を調査対象とする。なお、平成28年度の実践実習は就学前児童を対象とした実践実習と障がい児を対象とした実践実習を実施したが、本研究では就学前児童を対象とした実践実習に絞り調査を行った。平成28年度の就学前児童を対象とした実践実習の概要について次の通りである。

#### ◆平成28年度 就学前児童を対象とした実践実習

実践対象：認定子ども園青森中央短期大学附属第一幼稚園

活動場所：青森中央短期大学 体育館

認定子ども園青森中央短期大学附属第一幼稚園 園庭（5/19の活動のみ）

3 秋山真奈美（2011）「現場で求められる幼児教育実践力とは？－幼児教育職務尺度の作成を通じて－」佐野短期大学研究紀要第22号,129-141,2011,139頁参照。

4 時本らは保育現場の現状を鑑みると保育者養成段階において保育実践力を可能なかぎり高めること、卒後に自らその力を高められるようすることが養成段階で求められていると指摘している。そして、その一つの方法としてキッズリーダー資格取得学生に対する実践実習の導入を試みている。詳細は時本英知・工藤朗詠（2016）「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み－JFA 公認キッズリーダー資格を取得した学生に対する実践実習の実施－」青森中央短期大学研究紀要第29号,27-34を参照されたし。

5 時本英知・工藤朗詠（2016）「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み－JFA 公認キッズリーダー資格を取得した学生に対する実践実習の実施－」青森中央短期大学研究紀要第29号,27-34,32頁参照。

学生指導：青森県サッカー協会キッズ委員会 キッズリーダーインストラクター 2名

表1 平成28年度 就学前児童を対象とした実践実習の概要

		日にち	時 間	対 象 児 童	参 加 学 生 数			
					合計	1年	2年	専攻科
前期活動	1	4/21 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	12	6	6	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	11	3	5	3
	2	5/19 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	8	6	2	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	7	3	2	3
	3	6/16 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	12	6	6	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	13	6	5	2
	4	9/29 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	12	6	6	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	13	6	5	2
後期活動	5	10/20 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	5	5	0	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	4	4	0	0
	6	11/17 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	8	5	3	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	6	4	2	0
	7	12/15 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	5	3	2	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	5	3	2	0
	8	1/19 (木)	10:30-11:30	年長クラス A (約20名)	5	0	5	0
			11:30-12:30	年長クラス B (約20名)	5	0	5	0

## 2. 調査内容

平成28年度に実施した就学前児童を対象とした実践実習の全体的な実施方法と学生が担当した各回の具体的な活動内容について整理する。さらに、すべての活動を終了した2年生が記した感想コメントから平成28年度における実践実習の成果と課題の整理を行う。なお、本調査は青森中央短期大学教育開発・研究支援委員会の研究倫理審査を受け研究協力の手続きを行ったうえで、同意が得られたデータのみを活用し研究を進めた。

## Ⅲ. 結果

### 1. 実施方法

平成28年度の就学前児童を対象とした実践実習は表1の通り、前期活動4回と後期活動4回の計8回を設定した。学生に対して前期と後期それぞれ4回を1セットとして前期活動を4月上旬に、後期活動を9月下旬に参加者の募集を行った。その結果、参加人数は前期が開始時点で1年生が9名、2年生が11名、専攻科福祉専攻が3名であった。その後、1年生3名が6/16より新たに加わり1年生が12名となった。なお、5/19の活動については2年生7名が学外実習のため欠席している。後期活動については参加学生全員が前期活動からの継続参加で1年生が9名、2年生が5名、専攻科福祉専攻が0名であった。なお、10/20の活動については2年生全員が学外実習のため欠席している。また、

1/19の活動については1年生全員が学外実習のため欠席している。その他、表1で参加希望人数より参加者が少ない日については学生個人の都合により欠席があったためである。

実践実習の実施にあたり表1のような人数配分で参加学生を2つのグループに分け、その2つのグループが各期4回にわたりそれぞれ別の年長クラスを担当し活動を行った。ただし、1/19の活動については1年生の参加がなく人数が少ないため2年生の5名全員が両方の年長クラスに対して活動を行った。

実践実習の実施方法としては表2のように活動内容を「動きづくり系」「鬼ごっこ系」「ボールフィーリング系」「ゲーム系」4つに分類し、各回の内容が記載された活動について学生が担当するように設定した。その他の斜線が引かれた活動についてはサッカー協会の指導者が担当し指導実践の参考となるようにした。学生が担当となった活動については学生同士で話し合い1週間前に活動内容を検討し、図1の指導計画の様式に記し提出させた。提出された計画についてはソーシャルネットワークサービスを活用し、事前に参加学生全員とサッカー協会の指導者2名に活動内容を周知した。なお、第4回、第7回、第8回活動は4つすべての活動を学生が実施するため、活動内容検討のための話し合いの場にサッカー協会の指導者が同席し、学生が質問できる状況にしてアドバイスを受けながら活動内容の検討を行った。

メインコーチ (記入者)					
アシスタントコーチ					
実施日	年 月 日 ( )				天候
時間	～				
施設名					所在地
実施場所	<input type="checkbox"/> 園庭 <input type="checkbox"/> ホール <input type="checkbox"/> その他 ( )				
カテゴリー	<input type="checkbox"/> 年少児 <input type="checkbox"/> 年中児 <input type="checkbox"/> 年長児 <input type="checkbox"/> 小学1年生 <input type="checkbox"/> 小学2年生 <input type="checkbox"/> 小学3年生 <input type="checkbox"/> 小学4年生 <input type="checkbox"/> 小学5年生 <input type="checkbox"/> 小学6年生 <input type="checkbox"/> その他 ( )				
内容 (図、ルール) ①～④の[]内は、 【動きづくり系】 【鬼ごっこ系】 【ボールフィーリング系】 【ゲーム系】 を記入してください。	①【動きづくり】 分		②【鬼ごっこ】 分		
	③【ボールフィーリング】 分		④【ゲーム】 分		
用具	<input type="checkbox"/> ボール <input type="checkbox"/> コーン <input type="checkbox"/> ピス <input type="checkbox"/> ゴール <input type="checkbox"/> マーカー <input type="checkbox"/> リング <input type="checkbox"/> その他 ( )				
巡回指導員 コメント					

図1 指導計画様式

活動では学生がメインコーチもしくはアシスタントコーチの役割を担いながら活動を進めた。この役割はメインコーチが保育現場における活動を計画し中心となって進める保育者にあたり、アシスタントコーチがその活動をより子どもに近い位置でサポートする保育者にあたる。前期活動は2年生が子どもの前に立って活動を取り仕切るメインコーチの役割を担い、1年生と専攻科福祉専攻の学生がアシスタントコーチの役割を担った。後期活動については1年生がメインコーチの役割を担い、2年生がアシスタントコーチの役割を担った。なお後期活動4回目については1年生が参加できないため、2年生がメインコーチの役割を担った。表2で斜線となっている活動についてはサッカー協会の指導者がメインコーチを担い、学生がアシスタントコーチを担いながら活動を実施した。

表2 平成28年度 実践実習の活動内容

	日にち	対象児童	学 生 担 当 活 動				
			動きづくり系	鬼ごっこ系	ボールフィーリング系	ゲーム系	
前 期 活 動	1	4/21 (木)	年長クラス A	アイスブレイク 「肩たたき」	魔法鬼 バナナ鬼		
		年長クラス B	アイスブレイク 「ゆうえんち」	こおり鬼 なりきり鬼 増え鬼			
	2	5/19 (木)	年長クラス A		手つなぎ鬼	コーン通り抜け ドリブル	
		年長クラス B	ボールを持って リレー				ボール2つで サッカーゲーム
	3	6/16 (木)	年長クラス A	ジグザグリレー	レンジ鬼	ボールキャッチ & 足止め	
			年長クラス B	コーンにビブス 掛けリレー	農夫とにわとり	ボール手渡し・ パス回し	
	4	9/29 (木)	年長クラス A	木の中の○○	バナナ鬼	ボールを使って まねっこしよう	ボールを増やし サッカーゲーム
			年長クラス B	うさぎさんが○○	餌の時間だよ	ボールタッチ	動物を檻に 入れよう
後 期 活 動	1	10/20 (木)	年長クラス A		バナナ鬼 わんわん鬼		
			年長クラス B		バナナ鬼		
	2	11/17 (木)	年長クラス A		わんわん鬼		
			年長クラス B		うさぎ鬼	人参リレー	
	3	12/15 (木)	年長クラス A	お座りゲーム フープくぐり	レンジで鬼 手つなぎ鬼	(未実施)	なりきり動物
			年長クラス B	エビカニダンス	エビカニ鬼ごっこ	エビカニボール 転がし	エビカニサッカー
	4	1/19 (木)	年長クラス A	コーンにビブス 掛けリレー	レンジ鬼 手つなぎ鬼	フープにボール 通し	ボールを増やし サッカーゲーム
			年長クラス B	コーンにビブス 掛けリレー	レンジ鬼 手つなぎ鬼	フープにボール 通し	ボールを増やし サッカーゲーム

## 2. 活動内容

平成28年度の実践実習において学生が検討し実施した具体的な活動内容は表2の通りである。実施するにあたり、まずは「動きづくり系」の活動と「鬼ごっこ系」の活動を軸に実践を進めた。その理由としてこの2つの活動はボールを使用しなくても活動を実施することが可能であり、サッカーの経験の少ない学生でも自らが経験した遊び等を取り入れながら実践できるためである。また、サッカー経験のない子どもやサッカーに興味の薄い子どもであっても、抵抗なく遊びながら運動に必要な要素を含んだ活動を行うことができるためである。その後、サッカー協会の指導者が行う活動内容を参考にしながら実践する活動系統の幅を広げていった。

ここでは2年生がメインコーチとなって実践を行った前期活動の1回目と4回目、後期活動の4回目の活動内容とその活動の様子について整理し、それぞれについて考察していく。

### ① 前期活動1回目の活動について

前期活動の1回目は子どもと学生との関係が築けていない状況である。そのため、お互いの緊張関

係を解消するために動きづくり系の活動にはアイスブレイクの目的を含んで実践した。年長クラス A で実施した内容は「肩たたき」で園児と学生が円になって座り前にいる人の肩を叩くという活動であった。初めての実践活動ということもあり、説明の際に緊張が見られた。そのため、子どもたちにその緊張が伝わってしまい表情の固い子どもが多く見られた。その状況は次の鬼ごっこ系の活動まで続き、鬼ごっこの活動でようやくほぐれていった。年長クラス B で実施した内容は「ゆうえんち」でメインコーチが遊園地にある乗り物の名称を言うと、それに合わせた動きを 1 人から 5 人で表現する（例えば「ひこうき」の場合は両手を広げて走り回る、「ジェットコースター」の場合は 5 名程度で肩を持って連なり走り回るなど）という活動であった。メインコーチは活動内容を口頭と身振りで丁寧に説明したが、子どもたちは内容を理解することが難しい様子で少々緊張した様子が伺えた。しかし、活動がスタートすると子どもたちはアシスタントコーチの様子を確認しながら活動を理解し、次第に楽しそうに活動する様子が見られた。1 回目の活動としては両クラスの活動ともに活動説明がポイントになっている。両クラスでの共通する点としてメインコーチの学生が“しっかりと活動内容を伝えなければ”という思いが強く見られていた。そのためクラス A のメインコーチの学生は「自らの説明が正しいのか？」という不安から緊張として現れ、クラス B のメインコーチの学生は「自らの説明が伝わっているのか？」という不安を感じてしまい必要以上に丁寧に説明するという形で現れていた。また、両クラスにおいてアシスタントコーチの学生が説明の際に子ども達と少し距離をとって立っている状況であったため、子どもは圧迫感を感じていた可能性があった。

## ② 前期活動 4 回目の活動について

前期活動の 4 回目は「動きづくり系」「鬼ごっこ系」「ボールフィーリング系」「ゲーム系」のすべての活動を学生が実践した。

「動きづくり系」の活動として年長クラス A で実施した内容は「木の中〇〇」という活動であった。この活動は 3 人 1 組となりそのうち 2 人が両手をつなぎ“檻”をつくる。もう 1 人はメインコーチが言う“動物”の真似をしながら手をつないでいる 2 人の“檻”に入る。メインコーチの「〇〇（動物名）が逃げたー」という合図でその 3 人組はバラバラになり、新しい 3 人組を作り 2 人が“檻”、1 人が“動物”になるという活動である。年長クラス B で実施した内容は「うさぎさんが〇〇」という活動であった。この活動はだるまさんが転んだの要領で、鬼となったコーチが「うさぎさんが〇〇した」という言葉に合わせてその動物の真似をしながら鬼に近づく。最後に鬼にタッチをして逃げるという活動である。両クラスの活動ともに学生が考えた活動であった。活動説明ではデモンストレーションを見せながら説明し、子どもがイメージを持ちやすいように工夫していた。また、活動の際は子どもと一緒にアシスタントコーチの学生が入り、鬼に指定された動物の真似や動きを学生が面白くやってみせると、その動きに子どもが追従したり、子どもがさらに面白い動きをしながら活動する様子が見られた。

「鬼ごっこ系」の活動は年長クラス A ではこれまで経験したことのある活動や少しアレンジを加えた活動を実施した。子どもにとっては経験しているためスムーズに活動入ることができていた。年長クラス B で実施した内容は「餌の時間だよ」という活動であった。この活動はメインコーチが「餌の時間だよ！今日の餌は〇〇だよ！」と言うと、動物となった子どもたちが動物の真似をしながら言

われた餌と同じ色の三角コーンまで近づいてくる。子どもたちが近づいてきた頃に鬼役であるアシスタントコーチが、「お祭りだ！」と言いながら捕まえに来る。子どもたちは元いた場所まで逃げ、途中で捕まるとお祭りに使う食材になるという活動である。活動自体は直前にやった「動きづくり系」の活動内容と近く、ルールに色や新たな物語が加わり発展させた活動であった。前の活動と連動させ段階的にルールを加えたことで活動内容が少々複雑な割に子どもの活動理解もスムーズで子どもたちは非常に盛り上がって活動していた。

「ボールフィーリング系」の活動として年長クラス A で実施した内容は「まねっこしよう！」という活動であった。この活動は前でメインコーチがボールを使った様々な動きを見せ、それを子どもたちが真似をするという活動である。年長クラス B で実施した内容は「ボールタッチ」という活動であった。この活動はコーチの言う体の部位でボールを触ったり、手でドリブルして壁に触りに行き足でドリブルして戻ってくるという活動である。両活動ともやって見せながら活動の説明を行っており、活動自体もシンプルな活動のため、子どもたちが戸惑いを見せることはなかった。

「ゲーム系」の活動として年長クラス A は「ボールを増やしサッカーゲーム」を行った。子どもを半数に分け 2 チーム作り前半は子ども同士での試合を行った。試合開始直後はボール一つで試合を進めるが、時間の経過と共にボールの数を増やしていった。後半はボールを増やした状態で子どもとコーチが試合を行った。ボールを増やすことで子どもたちは触りやすそうなボールを探しながら活動を行っていた。年長クラス B は「動物を檻に入れよう」という活動であった。ボールを動物にゴールを檻に見立て、檻に動物を入れていくという設定で試合を行った。また、ボールの色によって動物に見立て（白：ひつじ、ピンク：うさぎ、水色：ぞう）、コーチが「ひつじを檻に入れよう！」などと声をかけボールを指定しながら活動を行った。また、子どもの中には「うさぎどこ？」などと探しながら試合を行う様子が見られた。サッカー活動に関心の低い子どもにとっては「檻に動物を入れる」という目的が設定されているため、活動に入りやすい状況であったと考えられる。

### ③ 後期活動 4 回目の活動について

後期活動 4 回目は 1 年生が不参加であったため 2 年生がメインコーチを担い、「動きづくり系」「鬼ごっこ系」「ボールフィーリング系」「ゲーム系」の活動を実践した。なお、年長クラス A の活動と年長クラス B の活動は同じ 2 年生が担当した。

動きづくり系の活動として「コーンにビブス掛けリレー」を行った。この活動はグループを 2 つに分け各グループ内で 2 人 1 組となる。2 人でビブスの四隅を持ちその上にボールを乗せながら、ビブスと同じ色の三角コーンまでボールを運ぶ。三角コーンに使用したビブスを掛け、2 人でボールを持って戻り、次の 2 人組のビブスにボールを乗せて交代するというリレーである。この活動は様々な要素が多く含まれており、子どもが理解して活動するにはある程度丁寧に説明する必要があった。そのため、説明に時間がかかり、またリレーという性質上、活動時間よりも待つ時間が長くなってしまっていた。

鬼ごっこ系の活動としては「レンジ鬼」と「手つなぎ鬼」を行った。「レンジ鬼」は鬼にタッチされるとその場で固まる。鬼にタッチされていない人は 2 人で両手をつないで「レンジでチン」と言いながら、固まっている人を両手の輪に通して溶かし助けるといった活動である。「手つなぎ鬼」は鬼にタッ



チされるとタッチされた鬼と手をつなぎ、鬼になっていない人を一緒に追いかける活動である。この2つの活動はこれまでも行ったことがあり、馴染みのある活動であるため、子どもたちが非常に入り込める活動でもある。そのため、この活動で運動量と時間短縮を計ることができていた。

ボールフィーリング系の活動として「フープにボール通し」を行った。この活動はコーチたちがフラフープを持って動き、子どもがボールを手で持って追いかけ、コーチの持ったフープにボールを投げて通すという活動であった。この活動は内容がシンプルなためスムーズに活動を行うことができた。また、近くにいる子どもの状況に応じてフラフープを持ったコーチが移動のスピードや動きを変え運動量や難易度を調整しながら活動を行う様子が見られた。

最後にゲーム系の活動として「ボールを増やしサッカーゲーム」を行った。子どもを半数に分け2チーム作り、2つのコートで子ども対コーチの試合を行った。試合では時間の経過と共にボールの数を増やしていった。子どもたちはこれまでのゲーム系の活動を通して役割が分かれてきており、どんどんシュートをしに行く子どももいれば、ひたすら自分たちのゴールを守る子どもに分かれていた。

#### IV. 考察

平成28年度の就学前児童を対象とした実践実習を通して、学生の変化が見られた点として“子どもとの距離感”と“状況に応じた活動内容の調整”が挙げられる。ここではこの2つの視点から学生の変化について考察し、今後の実践実習のあり方について検討する。

##### 1. 子どもとの距離感について

前期活動を中心に子どもと学生との距離感が離れているように感じられる場面が多く見られた。例えば活動説明の際にはアシスタントコーチである学生が子どもと一定の距離をとりながら、子どもをとり囲んで立っている姿が見られた。また、活動中は活動説明の時より距離は近いものの、一緒に活動するというよりは子どもの状況を見守るという様子であった。しかし、後期活動に入ると学生は自然な位置で子どもと一緒に活動の説明を聞き、活動が始まれば共に活動をするという姿が多く見られるようになった。そのため子どもから学生へ何かを伝えたり、確認したりする様子が見られるようになっていった。

津守（1997）は保育を経験する中で自分自身を「保育者というよりも危険が起こらないための監視人ではないかとの疑いが心に生じていた」<sup>6</sup>と述べている。これと同じように学生もまたはじめは子どもに怪我をさせてはならないという意識が強かったと考えられる。学生による感想コメントには「安全を確保するにあたり、全体を見渡しながら気づけることと子どもの視点で気づけることの両方があり、保育者としてはその両方が求められることが分かった」という記述が見られた。自分たちで活動を進め、繰り返す中で一定の距離を保つことが必ずしも全てではないことに気づき、距離感の変化として現れたと考えられる。

さらに、感想コメントに「子どもの近くにいれば、子どもから『なんて言ったの?』という問いかけがあり、そこで初めてその子の理解できていない部分を知ることができた」という記述が見られた。子どもを見守るだけでは彼らの分からなさに気づき、理解することは難しい。そのため、子どもからの働きかけで彼らの分からなさを知り、活動のあり方を考える機会が増えれば、必然的に学生の距離の取り方は変化していくと考えられる。



## 2. 状況に応じた活動内容の調整について

実践実習は活動を4つに分け分担当したため、一人一人の学生が全体の流れをあまり意識できないまま活動を進めてしまっていた。具体的には直前の活動において運動量が少なくなってしまうたり、活動時間がずれ込んでしまったりしていても次の活動では計画通りに進めることが前期活動で多く見られていた。しかし、後期活動になると子ども達や全体の状況を捉えながら計画内容の一部を実施しなかったり、以前実施した内容を加えたりする姿が見られるようになった。学生の感想コメントにおいて「アシスタントコーチの時に確認した子どもの言葉や反応から『自分の時はこうしてみよう』と考えられた」という記述が見られた。つまり、アシスタントコーチとして活動する子どもの様子を確認し、自らが担当する活動に置き換えて考え、自らが実践する活動内容の調整を行っていたということになる。上村(2012)は「学内における学びの段階では、子どもの実態が目前に存在しないため、子どもの姿に関する想像を膨らませたり、対象年齢に応じた遊びをデザインしたりすることの難しさが想定される」とし、その状況が「子ども不在の保育実践」へとつながる可能性がある<sup>7</sup>と指摘している。この点について実践実習での学びは子どもを意識し実践を検討する姿勢が確認されたことから、ある一定の効果があると考えられよう。

平成28年度の実践実習を通して“子どもとの距離感”と“状況に応じた活動内容の調整”という点について学生の成長が見られた。この2つの成長には子どもと学生自身の関係を作るという経験が必要不可欠である。そのため、実践実習においてはアシスタントコーチという立場での活動実践と、メインコーチという立場での活動実践という両方の立場における学びの確保とバランスが重要となると考えられる。今年度の取り組みを振り返ると前期活動のみ参加した学生の成長については通年参加した学生ほど明確に確認できていない。そのため、平成29年度の実践実習では前期と後期と分けずに通年で実施し、子どもとの距離感をつかみ関係を構築した上で実践経験を積めるように設定していきたい。その上で学生が活動調整力をはじめとした保育実践力を高めるなかで実施する活動は、子どもの運動量にどのような影響を及ぼすのかを明確にし、この実践実習の意義とあり方をさらに追究していきたい。

6 津守真(1997)「保育の地平 私的体験から普遍に向けて」ミネルヴァ書房,27頁参照。

7 上村晶(2012)「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」高田短期大学紀要第30号,85-94,86頁参照。

## 参考文献

1. 尾崎新編 (2005) 『『ゆらぐ』 ことのできる力 ゆらぎと社会福祉実践』 誠信書房.
2. 津守真 (1997) 「保育の地平 私的体験から普遍に向けて」 ミネルヴァ書房.
3. 秋山真奈美 (2011) 「現場で求められる幼児教育実践力とは？ - 幼児教育職務尺度の作成を通じて -」 佐野短期大学研究紀要第22号, 129-141.
4. 秋山真奈美 (2013) 「現場で求められる幼児教育実践力とは？ (2) - 『幼児教育職務実践力尺度』を作成するための調査結果における保育所保育士と幼稚園教諭の比較 -」 佐野短期大学研究紀要第24号, 45-57.
5. 上村晶 (2012) 「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」 高田短期大学紀要第30号, 85-94.
6. 上村晶 (2013) 「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察(2)」 高田短期大学紀要第31号, 79-88.
7. 小島千恵子 (2013) 「実践力を身につけるための実習プログラムの構築 - 学生の実習後の『保育者の資質と力量』についての振り返りの記述から -」 名古屋柳城短期大学研究紀要第35号, 173-181.
8. 時本英知・工藤朗詠 (2016) 「養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み - JFA 公認キッズリーダー資格を取得した学生に対する実践実習の実施 -」 青森中央短期大学研究紀要第29号, 27-34.